

## 通常の学級に在籍する場面緘黙症の中学2年生の生徒に対して、学校と保護者、学外関係者による協力体制に基づき指導を行った事例

### 1. 事例の概要

本事例は、場面緘黙症である通常の学級に在籍する中学2年生のA生徒に対し、学校と保護者、学外関係者による協力体制に基づき指導を行った事例である。

A生徒は、小学校から場面緘黙症のため、学校では一切声を出さない生徒であり、また、指示を聞き皆と同じように行動することにも難しさのある生徒であった。B中学校入学選考時からの不安が解消せず、入学当初は長期欠席状態となってしまった。そこで、小学校の関係職員、大学のアドバイザー、関係機関の相談員等も参加した（拡大）ケース会議を開催し、学級担任と支援員を窓口し、本人と保護者への支援を始めた。分離不安を抱えている本人と母親の関係を大切にしつつ、カウンセリングや情報交換、スモールステップを用意した登校刺激などを継続して進めた結果、遠方からではあるものの、行事を見学することが可能になり、1年生終盤には別室登校をスタートすることができた。

2年生時は、母親とともに別室に登校した場合の個別のカリキュラムを作成し、支援員が寄り添いながら複数の教員が個別授業を展開した。関係機関の相談員も交えたケース会議も継続して行い、3学期には保護者も参加して支援の方向性を考えるとともに、相談員が橋渡しになり、学級担任、教科担任、学年教員、関係機関と連携を図りながら取組を進めてきた。

**キーワード** 場面緘黙症、緊張、感情の表出、意思疎通、個別の学習、関係機関との連携

### 2. 児童の実態

中学2年生のA生徒は小学校から、級友や先生方と会話する場面は見られず、本人と教師や他の生徒との意思疎通は困難である。初めての場面や初対面の人と関わるときには緊張感が増し、動きが止まってしまうこともある。新たな環境への不安のままB中学校の入学式を迎え、初日から欠席した。発達心理臨床研究センターと小児心療内科へは、小学校から継続して通っており、本人や保護者は信頼を寄せている。

理解力や計算力に困難は無いが、授業を十分に受けていないためどの教科も達成状況が悪い。発言以外の意思表示の手段を確立するために文章力をつけることや、学習で躓いている部分を見つけ本人が乗り越えていけるような支援の必要性がある。

### 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 定期的に特別支援教育部会等の会議を開いている。また、大学の専門家を招いてのケース会議を行い、必要な助言を得ている。【基礎1】
- 校長、副校長、特別支援教育コーディネーター、各学年の特別支援教育担当者、養護教諭、支援員で構成した特別支援教育部会を中心に組織的な取組を図るため、特別支援教育部会を隔週で開催している。【基礎2】

- 壁掛け式のプロジェクターを各教室に整備し、活用している。ノートパソコンからの映像、生徒のノートやワークシートの映像、DVD教材やデジタル教科書を利用し、多くの生徒にとって「わかりやすく」なるように工夫している。【基礎5】

#### 4. 合意形成のプロセス

保護者を通してA生徒の思いを把握しながら支援員や教員が関わるようにした。A生徒への対応についてはケース会議等で相談し、保護者と合意形成を図り進めてきた。

#### 5. 合理的配慮の実際

- 支援員と特別支援教育コーディネーターが相談し、個別の授業カリキュラムを作成した。また、2年生の教員団に相談室でのマンツーマンの授業を依頼し実施している。相談室には、本人、母親、教員、支援員が入っているが、机の配置や発問や作業の指示を工夫し、母親への依存を少なくするよう配慮している。【合理①—1—1】
- A生徒の学習については個別で進めているため、内容は個人に合わせたものとし、興味や意欲、理解度に応じた内容や進め方で行っている。【合理①—1—2】
- 支援員は母親と一緒に、教科担任が読んでいる教科書の該当箇所を示してA生徒に視覚的に学習箇所を確認させるようにしている。教科担任によっては、ICT機器を活用したり作業的な内容を加えたりして進めている。【合理①—1—2】
- 支援員は、表情や仕草から気持ちを読み取るとともに、A生徒の考えを引き出すためにメモでのやり取りをしている。【合理①—2—1】

#### 6. 本事例の成果と課題

入学当初のつまずきから不登校状態になっていたが、その原因となる不安要素をできる限り取り除き、保護者を介する形で粘り強く伝えることで、本人の意思で学校へ向かうことができた。最初は定時登校が難しかったが、次第に定時登校ができるようになった。これは、不安となる要素を洗い出し、その要素を細かく取り除いていったことやほぼ毎日担任が保護者と連絡を取り学校の様子を伝えたこと、小学校から関わっている支援員がいつもA生徒の側に寄り添える状況を作ったこと等の結果であると考えられる。不安から緊張感が高まり、硬直して動けないA生徒を、まずは学校として受け入れ、その対応を考えることで、A生徒の緊張感を少しずつ取り除くことができた。学年の教科担任がA生徒に対する理解を深め、教科に応じた支援をしている。そのため、最初は支援員だけとしか過ごせなかった学校での時間を、多くの教員と過ごすことができるようになってきている。時には、教員からの語りかけや指示に対する反応はほとんどなく、緊張して動きが止まってしまうこともあるが、少しずつ教員の指示に従って行動したり、表情が和んだりする様子が見られるようになってきた。

A生徒は母子分離不安が強く、現在も母親とともに登校し個別授業を受けている。今後も母親と連携し、A生徒の緊張感を弛めながら、A生徒が自立していくための手立てを考えていく必要がある。